

通所リハビリ利用者に対する包括マネジメントに基づいた作業療法の効果**—高齢者に対する意味のある作業の実践—****Effect of occupational therapy using community management for elderly in daycare****—Practice of meaningful occupation—**○能登真一 (OT)¹⁾, 村井千賀 (OT)²⁾, 竹内さをり (OT)³⁾, 榎森智絵 (OT)⁴⁾, 岩瀬義昭 (OT)⁵⁾¹⁾新潟医療福祉大学医療技術学部作業療法学科, ²⁾石川県立高松病院, ³⁾甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科, ⁴⁾竹田総合病院通所リハビリテーションTRY, ⁵⁾鹿児島大学医学部保健学科

Key words: 作業, 高齢者, QOL

【目的】本研究は平成21年度に日本作業療法士協会が厚生労働省より受託した老人保健健康増進等事業の一部として実施されたものである。介護保険における通所リハビリテーション（通所リハ）利用者を対象に、作業聞き取りシートや作業遂行アセスメント表などを用いた包括マネジメントに基づいた作業療法の介入効果を検討した。

【方法】研究は11の道府県にある合計12の介護保険施設の通所リハ部門にて実施した。対象者は要支援1から要介護3までの高齢者で、介入群・非介入群それぞれ95名がエントリーされた。介入群に対しては作業聞き取りシートを用い、意味のある作業に対する実行度や満足度を調査した上で、作業遂行アセスメント表による評価を実施し、それらに基づいた作業療法介入を実施した。非介入群には通常の作業療法プログラムを実施した。アウトカム指標にはPhysical Activity Scale for Elderly (PASE), 老研式活動能力指標, 主観的健康感, Health Utilities Index (HUI) を用い、身体活動からIADL, 健康関連QOLまでを網羅した。なお研究の実施に際しては、すべての対象者に対し本研究の趣旨と目的を説明した上で、書面による同意を得た。

【結果】最終的にすべてのデータに欠損値のない対象者を分析の対象とした。その結果、対象者は介入群71名、非介入群67名となった。アウトカム指標のうちPASEに関しては、介入群で 64.1 ± 55.7 から 65.3 ± 57.4 へ、非介入群では 64.9 ± 63.0 から 63.0 ± 57.4 へとそれぞれ変化した。両群ともに差を認めなかった。老研式活動能力指標でも同様に両群における変化の差は認められなかった。一方、主観的健康感については介入群で 3.27 ± 0.81 であったものが介入後に 2.90 ± 0.91 ($p=0.001$)と有意に低下（主観的健康感は改善）したが、非介入群では 2.89 ± 0.92 から 2.75 ± 0.98 へと変化を認めなかった。同様にHUIでも、介入群で 0.39 ± 0.29 から 0.43 ± 0.24 ($p=0.039$)へと健康関連QOLの向上を認めたのに対し、非介入群では 0.49 ± 0.22 から 0.48 ± 0.23 と変化を認めなかった。さらにHUIの改善の有無を従属変数としたロジスティック回帰分析では、今回の介入のオッズ比は 3.8 ($p=0.006$, $95\text{CI}: 1.45-9.93$)となった。主観的健康感とHUIについて、介入方法と群分けにおける交互作用は認めなかった。

【考察】本研究事業では、対象者である高齢者一人一人にとって意味のある作業を見出し、その獲得を目標にした作業療法アプローチを実施した。この介入方法により、健康関連QOLの指標である主観的健康感とHUIの2つの指標で改善が認められ、対象者の健康度が増すことが実証された。対象者一人一人にとって意味のある作業を見出し、その獲得を目指す作業療法を実践することは、高齢者に一定の効果があり、今後の高齢者の健康増進に有用なアプローチであることが示唆された。